



Title	メタ倫理学におけるグローバルな進化論的暴露論証の問題点
Author(s)	大谷, 貴太郎; Otani, Kantaro
Citation	研究論集, 22, 121 (左) -135 (左)
Issue Date	2023-01-31
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/rjgshhs.22.l121">https://doi.org/10.14943/rjgshhs.22.l121</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/87864">https://hdl.handle.net/2115/87864</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_rjgshhs_22_p121-136_l.pdf



# メタ倫理学における グローバルな進化論的暴露論証の問題点

大 谷 貫太郎

## 要 旨

本論文の目的は、メタ倫理分野における「進化論的暴露論証 (Evolutionary Debunking Argument : EDA)」の性質を明確化したうえで、論証を成立させるために、EDA の支持者が今後応答しなければならない問題を提示することである。一般的にメタ倫理分野における EDA が突出した試みであると考えられている理由は2つある。1つ目は進化生物学や進化心理学などの近年の科学的知見に基づくアポステリオリな懐疑論証である点である。2つ目は、道徳的信念全体をターゲットとするグローバルな懐疑論を導出することを目的とする、野心的試みである点である。このような性質をもつ EDA が成立した場合、道徳的真理が客観的に存在すると主張する道徳的实在論に対する新たな強力な批判となると考えられている。だが、EDA を構成する、それぞれの前提には様々な問題が指摘されている。それらのなかでも特に重要であるのが、論証を成立させるに十分な証拠を提示できているのか、という経験的な問題、そして道徳的信念全体の正当性を掘り崩すことを目的にしながら、論証の成立のためには道徳的真理に関する想定を必要とする矛盾があるのではないか、という構造的な問題である。最後に両問題について検討したうえで、EDA の支持者がこれらの問題の両方に応答できなければ、EDA はアプリアリな懐疑論証か、より広範な懐疑論証に崩壊してしまう可能性が高いことを論じ、現時点では道徳的实在論に対する独自の批判に EDA はなっていないと結論付ける。

## 1, イントロダクション

近年の倫理学において、活発に議論されているトピックであるのが、「進化論的暴露論証 (Evolutionary Debunking Argument : 以下 EDA)」と呼ばれる論証である。この論証は、我々の道徳性の起源についての進化論的な説明に基づいて、懐疑論的結論を導出することを目的とする。

EDAは規範倫理・メタ倫理双方の分野において、ほぼ同時期に提起されており、規範倫理分野においては功利主義者であるピーター・シンガーやジョシュア・グリーンらが、義務論の批判を目的にEDAを展開している(Singer 2005, Greene 2014)。一方で、メタ倫理学分野においては、シャロン・ストリートやリチャード・ジョイスらが、認知主義や道徳的实在論<sup>1</sup>の批判を目的に展開している(Street 2006, Joyce 2006)<sup>2</sup>。両分野におけるそれぞれのEDAの大きな相違は、ターゲットとする道徳的信念の範囲である<sup>3</sup>。規範倫理分野におけるEDAは、一部の道徳的信念(具体的には義務論的直観に基づく信念)の正当化の否定を目指すのに対して、メタ倫理分野におけるEDAはあらゆる道徳的信念の正当化の否定を目指す。このような相違から前者を「ローカルなEDA」、後者を「グローバルなEDA」と呼ぶことにする。双方のEDAに関しては、すでに多様な議論が展開されているが、依然として合意された結論は存在していない。

本稿において注目するのは、メタ倫理学におけるグローバルなEDAによる道徳的实在論批判の妥当性である。グローバルなEDA<sup>4</sup>は、あらゆる道徳的信念の否定を目指す野心的な議論であり、道徳的实在論者はこのEDAを回避する方策を示さなければならない。すでに様々な論者が、EDAの問題点を指摘することによって道徳的实在論の擁護を試みているが、EDAの解釈の相違などによって、若干錯綜した様相を呈していることは否めない。本稿では、まずEDAを構成するそれぞれの前提を明確化したうえで(2章)、道徳的实在論者はどのような応答が可能なのであるかを確認する(3章)。それらの応答を踏まえてグローバルなEDAには、EDAの支持者が解決しなければならない数多くの問題点があり、現時点で道徳的实在論批判として成立することは困難であること指摘する(4章)。

<sup>1</sup> 本稿で想定する道徳的实在論は以下の命題をすべて受け入れる立場である。

- (1) 道徳的信念は真理値をもつ(認知主義)
- (2) 多くの道徳的信念は真である
- (3) 道徳的信念の真偽は、認識主体の(現実ないし理想化された)心的態度から独立であり、客観的に決定される。

(1)、(2)を受け入れ、(3)を否定する相対主義や構成主義などの立場も道徳的实在論に含められる場合があるが(Harman 2015)、本稿ではこのような分類は想定せず、反实在論とみなす。(3)は道徳的实在論者であるシェイファー＝ランダウによる「スタンス独立性(Stance-independence)」の理解に則っている。詳しくは(Shafer-Landau 2003 p15)を参照されたい。

<sup>2</sup> グローバルなEDAによって直接導出される帰結は、道徳的信念の正当化の否定であって、道徳的性質の不在ではないことには注意が必要である。道徳的实在論批判として成立するのは、道徳的实在論を前提とした場合、EDAによって道徳懐疑論が導出されることを示す帰謬法による。この点については2章2節で詳述する。また、本来ストリートは道徳的实在論ではなく、より広範な評価的(Evaluative)实在論の批判を目的としているが、本稿では便宜上、評価的实在論の部分集合である道徳的实在論批判として扱う。

<sup>3</sup> 本稿では道徳的信念と道徳的判断を同一の意味として扱う。

<sup>4</sup> 以下、特にことわりがない限り、「EDA」はグローバルなEDAを指す。

## 2, EDA の基本構造

EDA に共通する基本的な論証形式は以下のように構成される<sup>5</sup>。

(進化論的前提)：我々の道徳的信念の内容全体に進化は大きな影響を与えた

(説明的前提)：進化論的前提が正しいならば、我々が現在持つ道徳的信念の多くは、道徳的真理を前提とすることなく説明される

(認識論的前提)：説明的前提が正しいなら、我々の道徳的信念の多くは認識的欠陥をもつ

(懐疑論的結論)：したがって道徳懐疑論は正しい

それぞれの前提は形式的なものであって、論者によってどのように具体化されるかは異なる。また、論証の目的に応じて前提が付け足される場合もある。ゆえに具体化された EDA は多様多様なものになるが、その結論については道徳的懐疑論を導く点でおおむね一致している。以下では、それぞれの前提の内実について概説する。

### 2.1 進化論的前提

「進化論的前提」は EDA のアイデンティティとなる前提である。この前提の背後にあるのは、個体や集団の生存、繁殖を成功させるために人間は道徳性を獲得したと考え、その系譜の説明を試みる道徳起源論と呼ばれる議論である (内井 2002)。道徳起源論はダーウィンの「人間の由来」における著述を発端として、現在に至るまで進化心理学や進化生物学、一部の社会学、人類学に至るまで、分野を跨いで活発に論じられている。進化論的前提は、これらの研究による裏付けに決定的に依存した経験的なものである。このような前提の性質からも明らかのように、EDA は経験的な主張に基づいて構成されるアポステリオリな懐疑論証である点<sup>6</sup>が、他のアプリオリな懐疑論証などと区別される重要な相違点であり、EDA の特質である (Vavova 2015)<sup>7</sup>。注意が必要なのは、ここで個別具体的な道徳的信念の内容についての進化論的説明が試みられているわけではないことである。なぜなら派生的な道徳的信念を基礎づけている素朴

---

<sup>5</sup> 本稿では笠木 (2019) による EDA の定式化を参考にした。EDA の定式化の詳細については (Sauer 2018, Vavova 2015, Kahane 2011, Shafer-Landau 2012, Kumar & May 2019) などの解説も参照されたい。

<sup>6</sup> EDA がアポステリオリな論証であることを否定し、既存のアプリオリな懐疑論証に合流すると主張する論者もある (Klenk 2017)。詳しくは脚注 18 を参照。

<sup>7</sup> EDA は他のアポステリオリな懐疑論証とも異なっている (Shafer-Landau 2012)。それらは、例えば実際に存在する文化相対性などの道徳的不一致を指摘することによって遡及的に懐疑論を擁護するのに対して、EDA は道徳的信念の起源に関する証拠となる事実を指摘し、その起源が道徳的信念の正当性を損なうと考える原因論的な論証である。

な道徳的信念の内容に対する進化の影響を立証することができれば、間接的にすべての道徳的信念に対する進化の影響を立証することが可能になると考えているからである<sup>8</sup>。例えばストリートは、このように考えることで、道徳的信念に対する社会的、文化的、歴史的な影響や、合理的反省 (Rational reflection) による固有の影響の存在も認めることができると論じている (Street 2006 p114)。一方でジョイスはストリートとは異なる進化論的前提の定式化を行っている。ジョイスは「〇〇をすべき」といった強制力をもつ規範的信念が適応の産物であることを指摘したうえで、道徳的信念も規範的信念の一部を構成すると解釈する<sup>9</sup>。そのうえで、道徳的信念は、向社会的に行動する動機付けを行うための人類特有の適応であると示唆している。また、道徳的規範はいままで確認されたあらゆる人間社会に存在する普遍性を持ち、この普遍性が、道徳的信念が適応の産物であることの傍証となっているとも論じている (Joyce 2006 p135)。

## 2.2 説明的前提

「説明的前提」は、進化論的前提が正しいとすれば、我々が現在保持している道徳的信念に関しても、祖先と同様の方法で形成されたことを意味している。EDA に関して往々にして問題となるのは、ターゲットとなる信念の限定についてである。進化の産物であることは、道徳的信念だけではなく知覚的信念などについても同様に当てはまることであり、EDA によって意図せぬ広範な懐疑論が導出されてしまう可能性がある。そこで道徳的信念と知覚的信念の区別のために導入されるのが「説明的前提」である。道徳的信念が適応度を高めるための産物であるのであれば、道徳的信念の形成に関する進化論的説明は、その信念が真であることを前提とすることなく十分にすることが可能である<sup>10</sup>。一方で知覚的信念においては、火や捕食者や食料などの外的事実に関して、真なる信念を把握することが適応度を向上させたと考えることが自然であるため、知覚的信念の形成に関する説明は知覚的真理を前提にしたものとなる。このような説明における真理の想定の一必要性についての有無に基づいて、EDA のターゲットを道徳的信念に限定することで道徳的懐疑論のみを導出することが可能となるのである。ただし、

<sup>8</sup> 無論、このような道徳観が妥当であるかは議論の余地があり、拒否することも十分に可能である。この点についての詳細は3章3節を参照。

<sup>9</sup> ジョイスは、慣習や合理性などに基づく他の規範的信念と道徳的信念を区別する道徳的信念の特徴として、利益や目的とは無関係に行為を動機づけること、拒絶できない不可避なものであること、罰と報酬のシステムをもち、罪悪感を伴うことなどを列挙している (Joyce 2006 p70)。

<sup>10</sup> 道徳的性質を追跡するように我々が進化したとする説明は、祖先の状況とその状況に対する反応の間に適応的な連関を形成し、我々が繁殖に有利となるような信念を持つよう仕向けたと考える説明に対して、説明的儉約性や明快さの点で劣っているとストリートは指摘している (Street 2006 pp129-130)。しかし、このような議論に対しては異論も提示されている (Shafer-Landau 2012)。この点について3章2節において再度扱う。

このような、適応度の向上に道徳的真理の把握は必要ないとする説明が成立するためには、道徳的実在論<sup>11</sup>的な意味での道徳的真理が想定される必要があることが指摘されている（Kahane 2011）。なぜなら、道徳的非実在論の場合であれば、道徳的信念自体を認めないことや、認めたとしても適応的信念と道徳的信念の連続性や同一性を主張することに何の問題もないからである。このような場合、説明的前提は拒否され、EDAは成立しないだろう。これに関連して、EDAが成立可能なメタ倫理的立場が何かについては複数の見解があり、これはEDAの適用範囲の問題と対応している<sup>12</sup>。しかし、非自然主義的実在論はEDAの適応対象であることには合意が存在する（笠木 2019）。

### 2.3 認識論的前提

「認識論的前提」は説明的前提と懐疑論的結論の架橋となる前提である。進化論的前提と説明的前提から直接的に懐疑論的結論を導出することは演繹的に妥当ではない。そのため、真理を前提することなく道徳的信念が説明されることが、どのような認識的欠陥を持つかを具体化する必要がある<sup>13</sup>。特にグローバルなEDAにおいては、基本的には適応としての我々の道徳的信念が実際に道徳的真理を追跡していたなら、それは大きな偶然に過ぎない、という形式で具体化される。

ストリートはこの偶然をバミューダ海域における航海の例えで表している（Street 2006 pp121-122）。バミューダ諸島への到着を目的に航海に出発し、何もせずにランダムな風や潮流に船をまかせるだけで目的地のバミューダ諸島に到着することは困難であろう。もし到着

---

<sup>11</sup> 本文において、カヘインは「客観主義（objectivism）」という用語を使用しているが、本稿では用語の統一のため道徳的実在論に差し替えた。客観主義と道徳的実在論は区別される場合があるが（太田 2019）、本稿では同一であるとみなす。

<sup>12</sup> EDAの適用範囲についての議論には二つの方向性があり、道徳的実在論以外の立場にも適用されるとする場合と、自然主義など一部の道徳的実在論には適用されないとする場合がある。

前者については、例えば、認知主義を受け入れながらスタンス独立性を否定する反実在論である構成主義にも適用されると主張される（Joyce 2016）。具体的には、ジョイスは明確に構成的である10ドル紙幣の価値についての信念を占いの結果に基づいて保持している場合は信念が正当化されないことを例としてあげ、EDAの成立に道徳的実在論を想定する必要はないとジョイスは主張する。加えて構成主義における反省的均衡のメカニズム自体も適応の産物である可能性を指摘する論者も存在する（Tropman 2014）。また、認知主義にとどまらず、準実在論などの一部の非認知主義にもEDAが適用されるとする場合もある（Street 2011）。なぜなら準実在論においてもスタンス独立の規範的真理を想定するため、説明的前提が成立すると考えられるからである。

後者については、道徳的性質の因果性を認める自然主義的実在論に対してEDAは適用されないと主張される場合がある（Joyce 2006）。詳細については3章2節を参照のこと。

<sup>13</sup> EDAを含めた暴露論証一般の認識論的前提の具体化の種類についての解説は（Sauer 2018）を参照のこと。

したとしても、それは単なる偶然の一致にすぎない。ストリートによれば、道徳的真理と進化の関係は、この例におけるバミュダ諸島とランダムな風や潮の流れの関係に対応している。つまり、我々の道徳的信念は進化によって決定的に歪められており、それが道徳的真理と一致していたとしても、それは単なる幸運な偶然の一致に過ぎず、道徳的信念は正当化されないのである。

一方でジョイスは、ストリートとは違い、道徳的信念の形成方法の信頼度の低さに訴えて認識論的前提を具体化しており、これを「ナポレオンの薬」の例で表している (Joyce 2006 pp179-181)。飲むと「ナポレオンがワーテルローの戦いに勝った」という信念を形成する錠剤と、反対に「負けた」とする信念を形成する錠剤、加えてそれらの解毒剤が存在したとする。もし現在、例えば自分が「ワーテルローの戦いに負けた」という信念をもっており、かつ過去に自分が上記の錠剤のどちらかを盛られたことを示す十分な証拠があった場合、我々は解毒剤を飲んだうえで、新たな証拠が見つかるまで、ナポレオンのワーテルローの戦いの勝敗に関する判断を保留するべきであろうとジョイスは論じる。この例におけるナポレオンの錠剤は進化の影響に相当し、道徳的信念の進化的な由来を知ることが解毒剤を飲むことに相当する。我々の道徳的信念が進化の影響という真理と無関係な「錠剤」によって形成されたものであり、かつそれを知っているなら、その信念内容の真偽に関する判断は保留され、道徳的信念は正当化されないとジョイスは論じる<sup>14</sup>。ただし、信念が正当化されないことは、あくまで暫定的なものであり、今後信頼できる証拠が出てきた場合、道徳的信念の信頼性が回復される余地があるとも述べる<sup>15</sup>。ジョイスは以上のような留保によって信念が再度正当化される余地を残している点で、ストリートより穏健であると考えられることができるだろう。

## 2.4 懐疑論的結論

「懐疑論的結論」については、比較的論者の見解は一致しているが、その結論が認識論的懐疑論にとどまるのか、存在論的懐疑論（反実在論）を含意するものであるかという点で大きく二

<sup>14</sup> この点は、道徳的信念の進化的起源に関する知識によって、道徳的信念が正当化されなくなったのか、それともはじめから道徳的信念が正当化されていなかったことが明らかになったのか、二通りの解釈が可能である。前者は内在主義的認識論理論による理解であり、後者は信頼性主義的な理解であるが、ジョイスはどちらに解釈してもよいと述べている (Joyce 2006 pp242-243)。

<sup>15</sup> ジョイスの述べる「証拠」がどのようなものであるかは明確に述べられていない。ただし、それは道徳を外から正当化する非道徳的性質である必要があるだろう。なぜなら、ジョイスのEDAはそもそも道徳的信念全体を標的としたものであるため、道徳内部からの正当化は望めないからである。しかし、道徳外部の「証拠」によって正当化を行うためには、ヒュームの法則として知られている事実と価値の間のギャップを超える必要がある。ゆえに「証拠」を提出することが可能なのは、事実と価値の連続性を認められる自然主義者に限られるだろう。逆に言えば、ジョイスの留保は、道徳の自律性を主張する非自然主義者にとっては意味をなさないといえる。

つに分かれる。この点については EDA において道徳的实在論を想定する必要があるか否かに関する解釈が影響していると考えられる。例えば、ジョイスは、自らの EDA は存在論的懐疑論を含意しないと考えているが (Joyce 2006 p181-182)、このことが可能であるのは EDA において特定のメタ倫理的立場を想定する必要はない、と考えているためである<sup>16</sup>。一方で道徳的实在論の想定が必要であるとする場合、EDA により導出される認識論的懐疑論は道徳的实在論と矛盾するため、EDA もしくは道徳的实在論のどちらかを一方を否定する必要性が生じる。無論、道徳的实在論者は EDA を拒否するが、ストリートは前提となる道徳的实在論を否定し道徳的反实在論<sup>17</sup>を支持することで矛盾を解消する。本稿では基本的に存在論的含意を持つものとして EDA を扱う。

### 3、道徳的实在論者による応答

ここまで EDA の基本構造とそれぞれの前提について詳述してきた。实在論者は懐疑論を受け入れられないため、EDA を拒否しなければならない。そのため、進化論的前提・説明的前提・認識論的前提が、実際のところ成立していないことを示す必要がある。本節ではそれぞれの前提に対する批判を概観したうえで、实在論者の応答策の明確化を行う。

#### 3.1 進化論的前提を否定する

第一に考えられる EDA への自然な応答は進化論的前提の否定である。つまり進化の影響を受けていない道徳的信念の存在を主張することである。そのような道徳的信念が仮に存在し、かつ我々がそのことを知ることができるのであれば、その信念が我々の個々の道徳的信念を基礎づけていること示すことで、グローバルな EDA に対抗することが可能となる。具体的には、明確に不適応な道徳的信念を我々が保持していることを指摘することができれば、この主張はより説得的なものとなるだろう<sup>18</sup>。EDA の擁護者はそのような信念に対しても進化論的説明を与える必要があるが、それらが推測の域をでるか否かは不透明であり、さらなる実証的裏付けが

---

<sup>16</sup> ただし、シェイファー＝ランダウが指摘するように、ジョイスの論証も道徳的实在論批判として解釈することが可能である (Shafer-Landau 2012)。

<sup>17</sup> 具体的にはストリートは構成主義を支持する。構成主義は道徳的信念の真値値と、我々の多くの道徳的信念が真であることを認めながら、道徳的真理のスタンス独立性は拒否する立場である。そのため、道徳的真理と進化の影響が必然的な関係を受け入れることができるとストリートは主張する (Street 2006)。

<sup>18</sup> 例えば、シンガーおよびデ・ラザリ＝ラデクは普遍的利他精神など、一部の直観的な道徳的信念については淘汰圧に逆行する性質をもつため、進化の影響が及ばないと論じている (de Lazari-Radek and Singer 2012)。このような解釈はローカルな EDA を可能にする点でも重要である。

必要である。また、進化心理学的な説明は、道徳的信念の由来を進化の枠組みによって実証的に説明しようとするリサーチプログラムの一つであるため、そのような進化の枠組みに限定された説明が、他の説明に比してどれほど説得的であるか決定困難である可能性もある。例えば、同様の道徳的信念を、文化的模倣の観点からも同程度に説得的に説明できるかもしれない。いずれにせよ、ストリートやジョイスが主張するように、直接・間接的に進化が道徳的信念の内容全体に影響を与えたと考えることは、現時点では強い推測にすぎず、進化論的前提が正しいことを、より緻密に立証していく必要があるだろう<sup>19</sup>。無論、一方でこれらの論点の推移は、今後の実証的研究の展開に依存し、道徳的実在論者が望むように展開する補償はない。より確実にEDAに抵抗するには他の前提を拒否することが有望であろう。

### 3.2 説明的前提を否定する

説明的前提において問題となることは、そもそも適応的信念と真の道徳的信念が乖離すると想定することが可能であるか、という点である (Shafer-Landau 2017 pp179-182)。特にストリーートのバミューダ諸島の例からも明らかであるように、両者の明確な乖離が前提とされている。しかし、この前提に説得性を持たせるためには、適応的信念と真の道徳的信念が分離している例を示す必要がある。しかし、このような試みはいずれの場合も、適応的だが真の道徳的信念ではないことを示す際に、ある道徳的真理を前提とする必要が生じてしまう問題がある。例えば「肌や目の色が違う人間には攻撃的になるべきである」という信念が仮に存在し、この信念に対して我々が真の道徳的信念ではない、と判断したとする。この場合においては「肌や目の

<sup>19</sup> 例えばレヴィ&レヴィはストリーートの進化論的前提について大きく三点の問題点を指摘している (Levy and Levy 2020)。一点目に、我々の道徳的信念の変化のスピードは生物学的進化では説明しきれず文化的進化の観点で説明することが適切であること。二点目にストリートは互惠的利他主義を利用した議論を展開しているが (Street 2006 p116), 互惠的利他主義のモデルによって与えられる説明は二者間の利他主義についてであり、道徳のように多数の人が関係する状況で形成される信念・判断を説明することには不適切であると考えられる点である。三点目に、ストリートは我々の基礎的な道徳的信念には、時代や文化をまたがる普遍的な傾向性があると指摘しているが、(ibid, p115), そのような傾向性の代表例である近親相姦忌避や他者危害忌避についてでさえ経験的、理論的な問題点が示唆されており、普遍性は未だ実証されていないことを指摘している。これらの指摘が妥当であれば、進化の影響を受けた基礎的な道徳的信念が、他の派生的な道徳的信念に対しても影響を及ぼす、という構造を仮定したストリーートの進化論的前提は成立しないことになるだろう。またマシユレ&マロンは、ジョイスの進化論的前提の定式化が不十分であることを指摘している (Machery & Mallon 2010)。ジョイスの議論は道徳的規範が人間社会に普遍的に存在することを主張し、したがって進化した能力であると考え、その経験的な根拠づけが十分ではないと指摘する。なぜなら、ジョイスはあらゆる人間社会に規範が存在することから、自らが特徴づける道徳的規範も普遍的であると考えているが、このような推論をすると、道徳的規範が存在しないが、その他の規範が存在する可能性を排除することができないからである (ibid. p35)。

色の違いで態度を変えるべきではない」という道徳的信念が真であることを仮定しているだろう。適応的であることが真理を追跡しないことを具体的に例証するためには、道徳的真理の想定を避けることはできない。もし、このような想定が許容されるのであれば、道徳的実在論者も同様に道徳的真理を想定して自らの理論を擁護することが許容されることに加え、EDAの本来の目的と矛盾することにもなってしまう。以上のことから適応的信念と真の道徳的信念の分離を説明に経験的な例を持ち出すことはできない。よって、どれが適応的信念であり、どれが真の道徳的信念であるか、EDAの論者は具体的に区別できない状態でなければならない。もし、それでも適応的信念が真理を追跡しないことをEDAの論者が主張するのであれば、具体的な証拠に基づかない単なる印象に過ぎないことになり、説明的前提は極めて脆弱なものになってしまう。また、シェーファー＝ランダウは、仮に適応的信念を具体的に定義することができた場合でも、EDAの論者にとって新しい問題が生まれると指摘する。なぜなら、実在論者は、EDAの論者が提示する具体的な定義を満たさない道徳的信念を特定すればよいことになるからである。この場合も逆に詳細に定義されるほど実在論者に有利になるのである。

また、適応的信念と真の道徳的信念が分離する、という想定に対して両者は同一である、と反論することも一部の実在論者にとっては可能である。道徳的実在論の一つである還元主義的自然主義とよばれる立場は、道徳的性質が他の自然的性質と同一・還元関係にあり、因果性を持つと主張する。よって、還元主義的自然主義をとり、進化的に道徳的信念を形成した諸々の自然的性質と道徳的性質が同一・還元関係にあることを主張することができれば、適応度の向上と道徳的真理の把握を一致させることが可能である (Joyce 2006)<sup>20</sup>。このような観点の妥当性は、還元的自然主義自体のメタ倫理的立場としての魅力に一部依存するであろうが、すでに進化論的視点から還元主義的自然主義を擁護する議論もなされており (Sterelny&Fraser 2017)、興味深いEDAへの応答となりうる可能性がある。

### 3.3 認識論的前提を否定する

ストリートの認識論的前提に対して、有力な応答をしている論者としてヴァヴォヴァの議論がある (Vavova 2014)。ヴァヴォヴァはストリートのバミューダ海域での航海の例において前提とされている点として、道徳が進化の影響を受けた道徳的信念が道徳的真理と一致していることは単なる幸運であるゆえに、我々の道徳的信念は正当化されない、という確率に訴えた議論を展開していると指摘する (ibid.p82)。ここにはストリートが、道徳的真理が論理的にどの

---

<sup>20</sup> 非還元主義的自然主義の場合は、還元主義的自然主義と同様の戦略がとれるかは微妙である。なぜなら非還元主義的自然主義の場合、特殊 (sui generis) の道徳的性質の存在を認めるからである。この場合、非還元主義が説明的前提を退けることができるか否かは、道徳的性質独自の因果的説明役割がどの程度認められるか、という論点に依存すると思われる。

ようなものでもあり得ると考えていることが関係している (Street 2006 p122)。つまり、極めて多くの可能的な道徳的真理が想定できるなかで、進化による適応が道徳的真理と一致するということは極めて偶然にすぎない。このような確率的な観点から、我々の道徳的信念が真であると考えない理由がないとストリートは論じているのである。しかし、ヴァヴォヴァによれば、このような確率に基づく認識論的前提の定式化は、より広範な懐疑論を招くことになる(Street 2006 p82)。なぜなら、例えば知覚的信念に対しても同様に、論理的に可能な無数の知覚的真理と、我々が持つ知覚的真理の一致の確率の低さに訴えることで懐疑論を導出することができるからである。このような知覚的信念も含む広範な懐疑論は古来より存在する一般的なものであり、これではEDAの独自性がなくなることになる。そのため、ヴァヴォヴァは、ストリートの議論が、我々の道徳的信念は誤りである理由があることを示すとして、より穏健に再定式化を行う。だが、再定式化を行ったとしてもストリートの議論はうまくいかないとヴァヴォヴァは論じる (ibid.pp85-6)。なぜなら、ストリートはバミュダの航海の例に示されるように適応的信念と真の道徳的信念の分離を前提としているが、このような前提から、我々の道徳的信念が誤っている理由を示すためには、適応的信念と真の道徳的信念が同一もしくは、相関する可能性を何かしらの道徳的真理を想定することで拒否する必要があるからである。しかし、このように道徳的真理の想定が許容されるのであれば、道徳的实在論者にとっても同様の想定が可能になってしまう<sup>21</sup>。加えて、本来のEDAの目的とも矛盾することになるだろう。こ

<sup>21</sup> 道徳的实在論者が、何かしらの道徳的真理について想定することが可能なのであれば「第三要因説 (Third factor account)」と呼ばれる反論が成立すると考えられている (Copp 2008; Enoch 2010, Skarsaune 2011)。この議論の主旨は、適応的信念と道徳的真理が相関していることを、両者間の因果性を想定すること抜きに説明することにある。ある状態 X をもたらす理由があるという道徳的性質を M とし、N を X の非道徳的性質であると仮定する。そして非道徳的性質 N を持つ状態をもたらす行為が適応的である、つまり行為者の相対的な適応度を高めることが進化論的な考察によって説明されたとしよう。このとき、「第三要因 Y」が、道徳的性質 M と、非道徳的性質 N を持つ行為を価値づける傾向についての進化的説明との間の関係を説明すると考えるのである。この第三の要因 Y は一般的に道徳的真理と相関しかつ適応度の高い基礎的な道徳的信念が想定され、道徳的性質と非道徳的性質を橋渡しとして両者を結びつける働きをもつ。このことによって一部の適応的信念と道徳的真理は両者間の因果性がなくても、第三要因を介して間接的に相関していると考えることができるのである。イーノック自身が想定する第三要因は「生存や繁殖の成功は、少なくともある程度良いことである」(Enoch 2011 p168) というものである。ただし第三要因はイーノックの想定以外にも、道徳的真理と相関しかつ適応度の高い道徳的信念と考えられるものであれば、第三要因に具体的にどのような信念を想定するかは特に制限はない。もし、第三要因説がうまくいけば、進化論的前提、説明的前提を受け入れたうえで、道徳的实在論が成り立つことを示すことができる。だが、EDA への応答に第三要因としての道徳的真理を想定することは論点先取であるとの批判がなされている (Street 2008 2016)。この論点先取の疑惑が第三要因説にとって最も大きなネックとなっているが、もし、何かしらの道徳的真理について想定することができれば、この批判を回避することができるようになるのである。

の問題は上述の説明的前提における問題と共通である。一方で、何も道徳的真理についての想定しないのであれば、事実上道徳について何も知らないことと同じになるため、適応的信念と真の道徳的信念の分離が成立すると考える根拠を提供できない。よって我々の道徳的信念が誤っている、と考える理由も存在しないことになるのである (ibid p93)。

ジョイスのナポレオンの薬になぞらえた認識論的前提に対しては、シェイファー＝ランダウは大きく二つの問題点を指摘している (Shafer-Landau 2012)。一つ目は、ナポレオンの薬の例と同様のことが、道徳的信念以外にも適用される可能性があることである。ジョイスは、ある信念群が真理と無関係な要素を起源とする可能性が排除できない場合、それらの信念群全てに関する判断を停止しなければならない、と考えている。しかし、このような条件は、ほぼ全ての可能な信念に関する判断をも停止してしまうことになる指摘する (ibid p14)。例えば、我々の全ての信念が邪悪な悪魔や脳科学者によって植え付けられたものであるかもしれない可能性は排除できないだろう。ここにジョイスの条件を当てはめれば、極めて広範な懐疑論が導出されてしまうことになる。ジョイスの議論が成立するためには、このような広範な懐疑論が誤りであり、対象を道徳的信念に限定できることが予め仮定されていなければならない。

第二の問題点は、ジョイスの呈示するナポレオンの錠剤の例が適切に進化と道徳的信念の関係を適切に反映できていないのではないか、という点である (ibid pp18-19)。ナポレオンの錠剤の場合、錠剤が信念に対して影響を与える確率が 100 パーセントであるのに対し、進化が道徳的信念に悪影響をどの程度与えているか不明であり、影響を与えていたとしてもそれは間接的である可能性がある。つまり、進化と道徳的信念の間に様々な要素を介在させることができる余地がある。この余地において、道徳的実在論者は合理的な洞察などによって進化による夾雑的影響を発見し、排除できると主張することができるかもしれない。例えば、過去に奴隷制度や性差別的制度などの悪質な文化的風習の影響を是正してきた歴史と同様のことが EDA に対しても可能であると考えるのである。この主張に対して、「是正に用いられる基礎的な道徳的信念もまた進化の悪影響を受けている」という反論がなされるかもしれない。しかし、この反論は現時点では経験的証拠を超えた推測に過ぎない。証拠に基づかない推測が可能であれば、実在論者側も同程度に是正可能性を推測によって論じることが可能になる。この点は 2 章において論じたストロートの進化論的前提に対する反論にもなるだろう。

#### 4, グローバルな EDA の問題点

ここまで、道徳的実在論者によってなされてきたグローバルな EDA に対する一連の応答について論じた。これらの応答をまとめると、EDA は次の問題に直面していると考えられる。

(1) 経験的問題：進化が道徳的信念の内容全体に影響を与えたことを立証する、より緻密な経

験的証拠を提示する必要がある。

- (2) 対象限定問題：EDA が道徳的信念のみを対象として限定できることが可能であることを示す必要がある。
- (3) 不可知問題：以上の(1), (2)の立証も含めて、道徳的真理がどのようなものであるかを想定しない、つまり事実上道徳について何も知らない状態でEDAを展開する必要がある

(1)は、進化論的前提における問題として指摘されていたように、現時点では、道徳的信念全体に進化が影響を与えたことを示す経験的証拠が不十分である点に対応したものである。経験的証拠が不十分のまま(1)の妥当性を推測によって正当化するのであれば、同様に道徳的実在論者も、例えば道徳的進歩と思われる歴史事実に依拠して親実在論的な推測をすることなどが許されることになってしまう。このような余地を許容しないためにも、EDAの論者はより徹底した経験的な根拠づけをすることが要求されている。

(2)は、EDAが前提している適応的信念と真の道徳的信念の分離が可能であるか、という問題点に対応している。このような分離がなければ、EDAは道徳的信念以外も懐疑の対象とするより広範な懐疑論証へと崩壊してしまう。ジョイスやストリートは道徳的信念の進化による形成過程の説明における真理への言及の不必要性という特質に訴えることで対象の限定を行っている。だが、先述したように、この点を立証するためには、何かしらの道徳的真理を前提としなければならない問題が存在する。EDAの支持者はこの問題を回避する何かしらの方策か、別の適応的信念と真の道徳的信念を区別する手段を提示する必要があるのである。

(3)については、(2)と共通しているが、EDAの論者は、論証全体において道徳的真理がどのようなものであるのかについて想定をせずにEDAを展開しなければならない。EDAが何かしらの道徳的真理について想定することで説得力を得ているのであれば、それは自己論駁であることに加えて、実在論者も同様に道徳的真理を想定することで、第三要因説をはじめとした実在論の擁護が可能になってしまうからである。つまり、EDAの支持者は、EDAを展開する場合には道徳的真理に関する不可知論者にならなければならない。しかし道徳的真理を想定しないことはいずれの前提の成立に対しても大きな困難をもたらすだろう。特に進化論的前提を経験的証拠によって補強していくためには、道徳的真理についての仮定が不可欠であると思われる(Kumar & May 2019)。

これらの「不可知問題」に対しては、具体的想定ではなく「もし道徳的真理が存在するなら、それらの道徳的真理は論理的に可能な道徳的信念の小さな部分集合と対応する」と仮定するだけで十分である、といった抽象的想定で十分であるとする反論が可能かもしれない(Wielenberg 2016)。だが、このような抽象的な仮定を採用することは、何が適応的信念であり、道徳的信念であるか判別がつかなくなることを意味する。そのため、進化論的前提を立証することが不可

能になるのではないかと、という問題が依然として生じる。なぜなら、具体的な道徳的真理の想定に則らなければ、何についての経験的証拠を示せばよいのか方向性が不明になってしまうからである。EDAの論者が進化論的前提の立証方法を説明することができず、それでもなおEDAの有効性を主張するのであれば、EDAは進化論的前提の必要ないアприオリな論証と事実上見分けがつかなくなってしまうであろう<sup>22</sup>。

これらの問題から、以上の(1)～(3)の問題を全て克服しながら、EDAを展開することは至難のわざであると考えられることができるだろう。道徳的信念の起源についての経験的な証拠に基づいて、道徳的信念全体の正当性を掘り崩すことを目指すEDAの野心的試みは、まさにその強力さによって、多くの制約とねじれに悩まされることになる。特に、経験的証拠に依拠していながら、道徳的真理に関して何かしらの想定を一切おこなうことができない制約がある点は、EDAの内でも最も大きな構造上のねじれであるということができる。これらの制約とねじれにより、EDAの論者は、EDAの持つ、アポステリオリ性、道徳的信念のみをターゲットとする対象限定性という性質の、片方もしくは両方をあきらめざるを得ないのではないだろうか。つまりEDAの独自性を維持することは困難であり、過去に提示されてきた懐疑論的問題に吸収される可能性が高いのである。これらのことから、EDAの論者から有効な克服策が提出されない限り、EDAは道徳的実在論に対する決定的な批判とはならないと結論付けたい。

## 5, まとめ

本稿では、次のことを論じてきた。まず、グローバルなEDAがどのような懐疑論証であるかを明確化するために、各前提の詳細について論じた。基本的にEDAは、我々の道徳的信念の内容全体が進化の影響を受けてきたこと示す経験的証拠に基づいて、我々の道徳的信念が道徳的真理を追跡できないことを示すことで、道徳懐疑論を結論として導出する論証であった。次に、各前提に対してなされてきた道徳的実在論者らによる主要な批判について論じ、現時点

---

<sup>22</sup> 実際に、EDAが確率的なアприオリな懐疑論証に回収されると主張する議論もある。例えば、クレンクは、EDAは「ベナセラフ・フィールドの挑戦 (Benacerraf-Field challenge)」と呼ばれる数学に対する懐疑論証と同一の構造をもつと主張する (Klenk 2017)。この挑戦は、数学的プラトン主義者は、数学的事実が客観的かつ非因果的性質であると想定しているが、そうであれば、なぜ我々の数学的信念が数学的事実を反映していると考えられるのかを、確率的な偶然以外の要素で説明しなければならないというものである。単なる偶然でしか数学的信念が真にならないのであれば、数学的懐疑論が導出される。この懐疑論証は数学的真理の非因果性定義から直接導かれるものであり、アприオリな論証である。クレンクは、同様の論証が道徳的事実をスタンス独立かつ非因果的性質とみなす非自然主義者にたいしても展開可能であると論じる。この指摘が正当であれば、進化論的前提は必要ではなくなりEDAの独自性は消滅することになる。この論証は、その他のスタンス独立性と非因果性の両方を持つ性質に対しても拡張していくことが可能であろう。

でEDAを構成するいずれの前提に対しても、多様な批判がなされており、EDAが成立しているとはいいがたいことを示した。そして最後に、道徳的实在論者の批判を参照してグローバルなEDAが成功裡に機能するためには三つの条件を満たしていることを示す必要であること明確化したうえで、EDAの論者は条件を十分に満たすことが、その条件の厳しさと構造的なねじれによって困難であると論じた。以上のことからグローバルなEDAがその特性を維持したまま、道徳的实在論への批判となることは現時点で困難であると結論付けた。

今後の展望として、グローバルなEDAがうまくいかなければ、シンガーやグリーンの議論に代表される一部の道徳的信念の集合のみをターゲットとするローカルなEDAが相対的に有力となると考えられる。ローカルなEDAは「不可知条件」を回避することができるうえ、グローバルなEDAに比して、経験的知見による裏打ちも豊かなものになっているからである(太田2021)。ただし、ローカルなEDAはグローバルなEDAに崩壊する可能性も指摘されており、依然多くの議論の余地がある(Kahane 2011)。

本稿ではEDAに対する道徳的实在論者による批判を中心に検討した。そのため、EDAの支持者による議論を詳細に扱うことができなかつたきらいがある。EDAの支持者による近年の議論も含めて、EDAに関する論争をより明確に整理することを、今後の研究課題としたい。

(おおたに かんたろう・人文学専攻)

## 参考文献

- ・ Copp, D. (2008). “Darwinian Skepticism about Moral Realism”, *Philosophical Issues* 18, 186–206.
- ・ Enoch, D. (2011). *Taking Morality Seriously: A Defense of Robust Realism*, New York: Oxford University Press.
- ・ Greene, J. (2013) *Moral Tribes: Emotion, Reason and the Gap Between Us and Them*, Atlantic Books. (竹田円訳『モラル・トライブズ ― 共存の道徳哲学へ (上) (下)』岩波書店, 2015年)
- ・ James, Scott M. (2010). *An Introduction to Evolutionary Ethics*. Wiley-Blackwell. (児玉聡訳『進化倫理学入門』名古屋大学出版会 2018年)
- ・ Joyce, R. (2006). *The Evolution of Morality*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- ・ Joyce, R. (2016). “Evolution, truth-tracking, and moral skepticism,” in *Essays in Moral Skepticism* (Oxford University Press, 2016): 142–158.
- ・ Kahane, G. (2011), Evolutionary Debunking Arguments. *Noûs*, 45: 103–125.
- ・ Klenk, M. (2017). Old Wine in New Bottles: Evolutionary Debunking Arguments and the Benacerraf-Field Challenge. *Ethical Theory and Moral Practice*, 20(4), 781–795.
- ・ Kumar, V & May, J. (2018). How to Debunk Moral Beliefs. in *Methodology and Moral Philosophy*, ed. by Jussi Suikkanen & Antti Kauppinen, Routledge (2019), 25–48.
- ・ Lazari-Radek, K., & Singer, P. (2012). The Objectivity of Ethics and the Unity of Practical Reason. *Ethics*, 123(1), 9–31.

- ・ Levy, H. and Levy, Y. (2020) Evolutionary Debunking Arguments Meet Evolutionary Science. *Philosophy and Phenomenological Research* 100(3): 491-509.
- ・ Machery, E & Mallon, R (2010). Evolution of morality. In John Michael Doris (ed.), *The Moral Psychology Handbook*. Oxford University Press. pp. 3.
- ・ Sauer, H. (2018), *Debunking Arguments in Ethics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- ・ Shafer-Landau, R. (2003). *Moral Realism: A Defence*. Oxford University Press.
- ・ Shafer-Landau, R. (2012) “Evolutionary Debunking, Moral Realism, and Moral Knowledge,” *Journal of Ethics and Social Philosophy* 7: 1-37
- ・ Shafer-Landau, R. (2017). Moral Realism and Evolutionary Debunking Arguments. In M. Ruse & R. Richards (Eds.), *The Cambridge Handbook of Evolutionary Ethics* (Cambridge Handbooks in Philosophy, pp. 175-187).
- ・ Singer, P. (2005). Ethics and Intuitions. *The Journal of Ethics*, 9, 331-352.
- ・ Skarsaune, K. O. (2009), “Darwin and Moral Realism: Survival of the Fittest”, *Philosophical Studies* 152, 299-43.
- ・ Street, S. (2006). “A Darwinian Dilemma for Realist Theories of Value” *Philosophical Studies* 127: 109-166
- ・ Street, S. (2008). Reply to Copp: Naturalism, Normativity, and the Varieties of Realism Worth Worrying About. *Philosophical Issues*, 18, 207-228.
- ・ Street, S. (2011). Mind-Independence Without the Mystery: Why Quasi-Realists Can’t Have it Both Ways. In Russ Shafer-Landau (ed.), *Oxford Studies in Metaethics*, Volume 6. Oxford University Press. pp. 1-32.
- ・ Street, S (2016). Objectivity and Truth: You’d Better Rethink It. *Oxford Studies in Metaethics* 11.
- ・ Tropman, E. (2014), “Evolutionary Debunking Arguments: Moral Realism, Constructivism, and Explaining Moral Knowledge”, *Philosophical Explorations* 17, 126-40.
- ・ Vavova, K. (2014). Debunking Evolutionary Debunking. *Oxford Studies in Metaethics* 9: 76-101.
- ・ Vavova, K. (2015) “Evolutionary Debunking of Moral Realism”, *Philosophy Compass*, 10, 104-116.
- ・ Wielenberg, E. J. (2016). Ethics and evolutionary theory. *Analysis*, 76(4), 502-515.
- ・ 内井惣七 (2002) 道德起源論から進化倫理学へ：佐伯・亀田編『進化ゲームとその展開』共立，2002，228-252
- ・ 太田紘史 (2021) 二つの倫理学領域における進化的暴露論証一対比と反省『社会と倫理』第36号 2021年 107-120
- ・ 笠木雅史 (2019) 進化論的暴露論証とはどのような問題なのか：蝶名林亮編著『メタ倫理学の最前線』勁草書房 183-216
- ・ 横路佳幸 (2021) 進化論的暴露論証とヒュームの構築主義：ストリートによる議論の批判的検討。『社会と倫理』第36号 2021年 121-140

